慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	藤井茂著 外国貿易の理論
Sub Title	
Author	岩田, 仭
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1942
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.36, No.5 (1942. 5) ,p.438(78)- 442(82)
JaLC DOI	10.14991/001.19420501-0078
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19420501-0078

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

藤井茂著「外國貿易の理論

岩田田

仞

國貿易理論上の立場を明らかにされてゐるのである。 論を中心として展開され、その反省の裡に新しい理論の建設を企圖せられてゐる。 著者が過去敷ケ年に且つて發表された論文を纒められたものである。その内容は古典學派の外國貿易 更に著者は本書に於て、その外

に闘する説明上の困難が除却せられるとなすのである。 である。要するに問題は部分特化を想定することに求められ の比較生産費説に對して、從來幾多の批判が下されてゐる。著者はその代表的なものとして、パレートとパーンズ 増加せしめるといふ意味に於て利益であるといふことが出來るのである。二五一頁)と云はれる。 **労働及び資本の節約と云ふ事實は、商品價格を低下せしめるととによつて、國民的實質所得從つて國民の享樂額を** られる。先づ比較生産費説は、第二章「外國貿易上の利益」として論ぜられ「外國貿易による生産物總量の増加又は 古典學派理論に關しては、その中核をなす比較生産費說並びに國際價值論が採り上げられ、その妥當性を吟味せ 更にバステーブルーメーリング、エルスワースの諸説を援用して、比較生産費説を辯護せられるの 國貿易の利益測度を生産物總量の増加及び勞働並に資本 ・その容認が必要であり、又それによつて貿易の利益 斯かる課題として

の利益を右の如く解すること自體に、まだ問題が残されてゐるのではなからうか。 節約に求める限り、比較生産費說の安當性を容認し得ることは、著者の云はれる如くである。併

較生産費原理と國際價値法則とを、國際商品價値決定に際して同時的に適用せられんとするのであり、 産費に基く國内價値とが一致したものと見ることが出來ると概念。(一〇九頁 として、これを解決せられてゐるの 至つて供給の不足額が國內生産によつて補はれると見ることが出來、從つて國際價値の均等に基く國際價値と、 の價値が國內生産費によつて決定せられるのか、或ひは國際需要の法則によわて決定せられるのか、 その何れかを捨てることによつてのみ、矛盾なき理論へ進み得るのであつて、 生産物が生じた場合、價値法則の二元性に基く矛盾は避け得られないのである。(前掲指著三八十四九頁)。吾々は めて行はれるのであつて(前掲排著一二〇十一六一頁)、 産費と國際間の需要とは相互に補足しあふ關係に置かれる。かゝる一般均衡理論的把握は近代的貿易理論に於て始 的前提であり、二つの價價値原理による二段的說明が行はれる。(前掲抽著二〇—三七頁)その限りに於て、 著者はそれに對して、「この場合には國際價值法則は依然として輸入商品の價値を支配するものであるが、國內 ・價値原理としての比較生産費脱(因果的價值思想)の放集と國際價值論(均衡思想)の展開、 かくる解決は近代理論的であり、著者の貿易理論上に於ける立場の一つの動向が伺はれる。 ために輸入商品の相對價値が高まり、遂には國内に於ける生産費、償ふ點まで引上げられ、 更に進んで價値法則の二元性の問題を惹起する。即ち部分特化は共通生産物を生ぜしめ、そ 古典學派理論にあつては比較生産費原理は國際價值論の論 C前掲拙著九二―一一七頁)著者の解 即ち近代的貿易理 その矛盾であ 即ち著者は比

藤井茂者「外國貿易の理論」

論への途であると解し得られる。

實際政策上の價値も浚することが出來ないと思はれるのである。」(一七七頁)と云はれ、我國の「交易條件」に就て趣 その二は生産費説を最初から放棄して經濟均衡の諸要素の相互依存關係の中に價格形成を説かんと する 方法であ 的數量關係を意味す」(一一四頁)と規定し、ミル並びにマーシャルに從つてその決定要因を說明せられる。その場合 グに從つて「交易條件」と云ふ如き一つの指標に基いて現象の本質を探ることは啻に理論上必要であるのみならず、 著者に於ては單なる一つの指標として示されるに止まり、 味を持つことしなる。 易商品間の數量關係として捉へられ、貿易變化に伴ふそれの變化が國民所得の變化の形に於て、貿易利益分屬の變 味ある研究を付加せられてゐる。 る。八二三四頁)著者は、この立場を異にする二つの理論から を承認して推論し、後に至つでその理論體系よりこれを排除することによつてこれを改修せんとする方法であり、 次に國際價値論は、第三章で「交易條件」を中心として論ぜられる。先づ「交易條件は交換せられる商品間の實質 兩者の比較較重の問題を提起せられる。

(一七○頁)、交易條件」はその結果極めて限られた範圍に於てのみ、意 の地位の變化判定の指標として「交易條件」の變化の外に貿易の量の增減をも考慮に加ふる必要があるとし し、從つて一國の貿易上の地位の變化を示すものであるといふ結論に到達した。(一七七頁)俳し乍ら、 述せる價値論の二元性に基く矛盾が願はれるのであるが、著者も亦それを認められ、その矛盾を排除する かくて古典學派理論に於ける政策判斷の基調たりし貿易の利益の分屬態様たる交易條件は、 ーンの見解を擧げられる。即ち「その一は一應古典學派及び新古典學派の勞働價值說 故にも近代的理論の性格が顯はれてゐる。併しクウシッ 共通的なものを抽ぎ出して、結局「交易條件」は貿

(抽稿「貿易理論の構造論的構想」國際經濟研究第二卷第九號、特に七参照) 生産要素の相對的關係、更に結合關係の推移を通じて、國民經濟構造の動態的觀察への動向が示されるからである。 著者も赤妓に於て一つの修正を試みられてゐるのである。本章に於ける論述は右の如く政策原理的課題の問題とし 基準を求められるのである。筆者は先に比較生産費脱による政策判斷の基調に関して疑問を提供したのであるが、 **發して、生産要素の移動性と關聯して生産者の利害と消費者の利害とを比較する必要を論じ、そでに外國貿易の利益** 典學派の樹立せる外國貿易の利益に關する觀念が如何なる點に於て修正されなければならないがを問ひ、古典學派 て興味があるばかりでなく、貿易理論の理論的内容の問題としても甚だ意味の深いものである。即ちそれによつて の理論に於て外國貿易の利益を輸入の利益性に求め、且つこれを常に消費者の利益によつて表現したこと」より出 性を中心として、 第四章は外國貿易利益の國內的分配の問題に當てられてゐる。古典學派貿易理論の基本的前提たる生産要素の移 ーソー、バローネ、更にハーバラー、 リング、の見解を追求する。それによつて、

外國貿易理論の動態論べの一つの手がよりを見出さんとしておられる。 紹介なき時、本章の論述の意義は少からざるものがある。著者はハロッドの分析の方法に多くの期待をかけられ、 第五章「國際均衡論」は、パロッドの説を中心に論ぜられてゐる。その內容は省略するが、吾國に於てハロッドの

更に第一章「外國貿易の概念」でその積極的立場が披瀝せられてゐる。 本書に於て以上の如く、從來の外國貿易理論に於ける重要な問題を通じて著者の見解が示されてゐるのであるが、

概念せられた関家は現實の政治國家より遊離せるものとなった。かくる欠略を除却するために政治國家の持つ經濟 近代的貿易理論への展開心際して、 外國貿易の概念は純粹經濟學的方法によって規定せられた。その結果そこに

を充分に把握し得るであらうかと云ふととである。いま一つはかくる内容を持つた構造理論によつでは經濟構造の 發展を理解し得ず歴史的具體的な國民經濟の概念に近付き得ないのではなからうかと云ふことである。ここではこ 造要素間の単なる相互依存性とそれを規定するものとして構造與件を列舉することによつて、果して國民經濟構造 的特性を指示する標識を列擧することによって、 を更に展開せられんととを、讀者と共に期待するものである。(十七・四・二十稿) れらの疑問を提出するに止め、その詳細は他日に期したい。著者がクレーマーの理論を乘り越へて、 と共に、國民經濟の具體的構造に接近するものと云ひ得る。併し乍らそこに若干の疑問が殘されてゐる。一つは構 を理解せんどするにある。それは所謂近代的貿易理論の採れる純粹經濟方法學的の持つ抽象性に基く欠陷を逃れる 二五―三八頁北川一男述「國民經濟の構造と外國貿易」商學經濟論叢第十八卷第四號)。要するにその構造理論の內容 「構造理論」(Strukturlehre)を適用せんとせられる。クレーマーの構造理論的外園貿易理論が著者の究局に於て採 らんとする立場の如くである。クレーマーの理論は旣に吾國にも紹介せられてゐるからその内容は省略する。《本書 し乍らその場合に於ても、標識の列舉主義は國民經濟の統一性を覆ひ得る もの で はない。故に於て著者は、所謂 は、國民經濟の構造要素と構造與件とを舉げ、兩者の因果關係、その作用關聯を明かにすることによつて外國貿易 外國貿易の概念規定をなさんとする試みが生れたのである。併 外國貿易理論

『古典質銀學説の發展』・・・・・・・・三、邊 清 一 郎		(社會經濟史資料紹介)	に現はれた・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	――リュペック市についての暫定的考察――市城設定と市民の土地取得・・・・・高・村・象・平	前號(第三十六卷) 目次
心は慶應	- 一	發行所 理財學 會	記記 ・	照和子七年 四月二十五日印刷約本 毎月一門一日 發行照和子七年 四月二十五日印刷約本 年月一門一日 發行際 業に關する用件は發賣所へ 登業に關する用件は發賣所へ	料 一ヶ年分 金五 園四拾銭 郵税金貮拾四銭